

S1-4

在宅ケアチームで地域を支える

富山赤十字訪問看護ステーション

かとう まりこ
加藤真理子

訪問看護は、住み慣れた地域で、自分らしい生活を送りたいと願う人々を支えるためにおこなわれており、対象は、年齢・性別・疾患や障害の有無を問わず、在宅で暮らす全ての人々である。近年の在院日数短縮により、医療依存度の高い利用者が在宅に移行するケースは増加の一途をたどっており、多様なニーズに応えるべく日々実践に取り組んでいる。

疾患や障害を抱えた利用者・家族が望む在宅療養を行う上で必要なのは、医療・介護両面からのサポートであり、他職種からなる在宅ケアチームを作り上げることで実現可能となる。そのためには、急性期病院や施設・在宅でのサービス事業者などが情報を共有し、安心・安全な環境を整備する必要がある。訪問看護は主治医の指示書に基づいて訪問が行われており、がんや難病などを含めた緩和ケア・高齢者の看取り・小児や認知症などの利用者に対して包括的指示のもと、利用者本人の全体像をアセスメントし、必要なケアを組み立てていくという専門性を有している。そのため、在宅ケアチームが有効に活動できるよう調整するという重要な役割を担っていると言える。

今回、在宅ケアチームでの実践を振り返ると共に、在宅療養生活を支えるために、主治医をはじめ各職種との連携から、信頼しあえる在宅ケアチーム作りについて考えていきたい。